

令和6年度第3回（第12期第5回）さいたま市社会教育委員会 会議録

開催日時：令和6年11月25日（月）10時00分～11時30分

開催場所：市役所第二別館2階 教育委員会室

出席者名：【委員】若原 幸範議長、石川 敬史副議長、井上 久雄委員、
今川 夏如委員、加藤 美幸委員、佐野 操委員、
澁谷 知範委員、関根 広美委員、林 弘樹委員

【事務局】（生涯学習部） 佐野 公子

（生学習振興課）辰市 健太郎、玉城 伸、石田 悦子、管野 敬之
三村 悟、伊藤 智美、駒井 友里香

（生涯学習総合センター）井出 浩史

（資料サービス課）阿久津 玲子

欠席者名：石崎 敬吾委員、小林 玲子委員、鶴ヶ谷 柊子委員、
藤田 成司委員、吉川 洋一委員、吉沢 浩之委員

公開・非公開の別：公開

傍聴人の数：なし

1 開 会

2 挨 拶

3 議 事

(1) 報告事項

ア 前回会議について

令和6年度第1回会議の概要について、会議録に基づき説明した。

イ 第66回全国社会教育研究大会 茨城大会について

第66回全国社会教育研究大会茨城大会の概要について、管野主幹より報告した。

(2) 第12期社会教育委員会 提言の作成について

ア 提言作成に関する質疑応答・意見

【質疑応答・意見】

＜林委員＞

これまでの会議では提言書を作成するためにワークショップを行ってきたが、提言が誰向けに出されて、どのようなアクションプランや事業を想定したものであるかを具体的な意図を確認したい。

<事務局>

提言は教育長に提出されることとなる。提言の内容にもよるが、提言の中で具体的に踏み込んだ提案があれば、それを受けてやりますし、教育委員会事務局生涯学習部としてはいただいた提言を共有している。提言に基づいたアクションプランを作るということはしていないので、提言内容の反映が見えにくいこともあるが、いただいた提言を真摯に受け止めて、事業への反映に生かしている。

<林委員>

社会教育は何をしているのかと訊かれた際に、社会教育の理念などを説明することはできるが、生涯学習の意味や意義を理解してもらえない。そもそも、市民に向けて生涯学習への参画を促していくことが重要であるとして会議を行っているが、会議自体の説明も難しく感じるところがある。今回だと働く世代にどのように働きかけていくかという具体的なコンセプトを持って行っている会議なので、提言を出したときに提言内容を受けて実際に対応できる体制などがあるのかを確認したかった。

<若原議長>

社会教育や生涯学習の理念がなかなか伝わらないということは我々の中でも長くテーマとなっていると思う。提言をする上で、市民に我々が考える理念をどのように伝え、理解できる施策にしていくのかということも含め議論したいと思う。

<林委員>

生涯学習ビジョンというものがあり、ビジョンの考え方を深めていくというのもいいが、ビジョン自体が分かりにくいと市民には届きにくい。行政側が具体的にどのような姿勢で他の委員の皆さんもどのように考えているのかを改めてお聞きしたかった。

<若原議長>

さいたま市の場合は社会教育計画に代わってビジョンを作成している。このビジョンがいつの実現を目指してつくられ、どのように実現していくのかを改めて確認しながら、議論やまとめをしていきたいと思う。

<加藤委員>

林委員の意見を聞き、理念や仕組みは対象を細かく絞り、具体的に作ることができると良いと思った。

<若原議長>

今回、働く世代とは誰なのかということも含め、排除される人が出ないようにあえて厳密

な定義をせずに広く定義して議論を進めてきた。最終的に提言としてまとめていく中でそれぞれのアイデアが出てくると思うので、そのアイデアが誰に向けてのものなのかを具体的にイメージしながら議論をしていきたいと思う。

イ 提言内容発表

全委員が提言内容について、一人ずつ意見を提示した。

【意見】

<若原議長>

大人であっても学ぶことや活動することを楽しめるような要素があると良いので楽しさを大切にしていきたいと思う。

繋がり方としては世代や職業を含め、多様な人たちが繋がりやすい緩やかな繋がりを大事にすることが重要である。

また、学びや教育が個人化しているように感じる。個人のスキルを高めていくことも重要だが、学びにより知識を身につけ、成長することは個人の出来事ではなく、地域や社会の財産となるものであるので、改めて学びの持つ公共性を意識して提言の作成に取り組んでいきたいと思う。

さらに、働き方も多様化しているので、働く世代を画一的に捉えるのではなく、多様に捉える視点を大事にしたいと思う。

<井上委員>

働く世代の生涯学習と地域活動への橋渡しということで、働く世代が自治会の活動や地域活動に参加することは難しいと感じているが。私が自治会長を務める自治会で子育てや、教育など共通の悩みを持つ人々をターゲットとした組織づくりをしたところ、新たに子育て世代が入ってきた。共通の話題で集まりを立ち上げ、コミュニケーションを図ることで、地域の繋がりができ、個人の成長にも繋がると感じた。

また、自分たちの課題を自分たちで見つけることで継続して活動を進めることができると感じている。

<今川委員>

実感という要素が重要であると感じている。自分たちの活動が自分や他者、地域のためになっているという実感が活動の継続に繋がっている。

地域や人と関わるところから様々なことが始まるので、入り口やきっかけは大切であると思う。

また、生涯学習や社会教育は人生において重要なものであると実感しているが、同じように実感を持つ人はかなり少ないと感じていて、身近な人にしか生涯学習や社会教育の重要性を伝えることができない。人々の様々な場所での様々な取組が重要で生涯学習のきっか

けとなるものであるため、その活動や取組を繋げていくことが大事であり、社会の歴史や未来のことを含め考えられるビジョンを示すことが重要で課題でもあると思う。

<加藤委員>

子育て中の親御さんなどは学ぶ必要性があるのでそれがきっかけになる。しかし、学ぶ意欲があっても、学びたいテーマがないと学ぶことができないので、多様なテーマが必要であると思う。

繋がりという点では口コミが最も効果がある。働く世代となると、駅の近くで学ぶことができるような場があったり、朝の時間帯で活動ができたりするとよいと思う。

また、図書館は多くの世代がいるので、デジタルの情報や本以外の情報があるときっかけや仕組みづくりになると思う。公民館も様々な事業を行っており、人々が集まる場所なので、公民館が拠点となり、すでにあるイベントを活用することで活動が継続されていくのではないかなと思う。

さらに、防災は自治会などを含めて人々が参加する場なので、このような場を活用して他の活動に誘導することができると思う。

最後に、働く世代は子どもの活動に引っ張られて親も活動に参加するという傾向があるので、コミュニティスクールなども活用できると良いと思う。

<佐野委員>

学びたい人がどのような学びをしたいのか、声を集めると良い。せっかくのリカレント教育なので、学びを通してウェルビーイングを感じ、自身の夢や地域に繋がり、根付いていくと良いのではないかな。

また、既存の団体が後継者不足で悩んでいるという話を団体の方から直接伺う機会があり、このような団体をこれからも継続し繋げていくためには、どうしたら良いのかとも考えた。

地域のリソースを生かして、学校ではチャレンジスクールが実施されたり、公民館を利用している活動があったりするが、このような活動や地域のボランティアの情報が地域にいなから入らず、次の活動に繋がっていないということがあると思う。

<林委員>

働く世代の生涯学習をどう理解していただくか、地域活動への橋渡しをどのようにするかということで、これまでのワークショップを振り返ると、何をやるかよりも誰がやるかということが重要であると感じた。そこで、プロの職員としてのブリッジパーソンやコーディネーターやこれらの人々を育成する人材が必要である。

生涯学習は多岐にわたるが、生涯学習ビジョンや公民館ビジョンにも入っている「地域づくり」という部分がわかりやすく、学んだものを地域に役立て公共性に繋げていくという面

では「地域づくり」で様々なことができると思う。その中で、ブリッジパーソンなどの存在が重要で、役割として登録するだけでなく、プロとして育成する学習の場をつくり、市民にも存在や具体的な役割を伝えることをしないと説得力がないと感じた。

以上を考えると、市長部局との連携が必要だと思う。人材が必要という面で同じ課題を抱えているので、定期的にブリッジパーソンなどの人材を育成することを考える会議や情報交換などを行っていただきたいと思う。

人が重要であるので、人について特化した提言にしても良いと思った。

<関根委員>

活動する人々を支えるために組織や所属を超えた全体を把握することができるサポート役が必要であると感じた。そして、活動をする人もサポートする人も無理のない時間で負担なく活躍できる場やときどきわくわくするような場を作り、必ず何かの気づきとなる場にすることが大事である。次もまた何かをしたいという思いが活動の継続に繋がると思う。

また、介護や子育て、防災など、自分自身が当事者にならないとわからないという人も多い中で、その以前から活動をしている人もいるので、このような人たちを繋ぐコーディネーターが必要であると感じる。

さらに、自分自身の持つスキルを生かすことのできる場を作ることができると良いと思う。

<澁谷委員>

働く世代の学習をコーディネートする窓口支援の機能が必要であると感じた。働く世代が地域活動に繋がる仕組みづくりに関しては、生涯学習を通じた社会教育として、国の提言で「ウェルビーイング」という言葉が挙げられているので、これを具体化することができると良い。生涯学習の良さとして人と人との繋がりが指摘されているので、地域の取り組み方針や事例を具体的に示すことでイメージが湧きやすくなる。

きっかけづくりに関して、働く世代は時間の制約が生涯学習に取り組む上での課題になるとアンケート結果でも紹介されていた。活動のしやすい時間帯の配慮や Web 会議の活用など柔軟で多様な場づくりがされると、働く世代の参加も促進されると思う。

働く世代が地域活動に繋がる仕組みづくりに関して、例えば地域の学習活動からスタートとして、続いて大学の公開講座や社会人向けの地域活動に関わる学習プログラムに参加するなど、生涯学習のステップアップの仕組みがあると良い。生涯学習を提供する組織や団体が地域活動への参画を促進するための具体的な連携が期待される。

働く世代の学びの継続に関しては、学びのステップアップの仕組みに加え、学習者間の交流にも一層の配慮があると良い。シニア世代向けと比較すると、働く世代向けの生涯学習プログラムでは、学習者間の交流にあまり力点が置かれていないように思うので、市内にとどまらず、県や全国、更には世界の学習者間の交流促進をも視野にした学び合うコミュニティ

の形成に配慮されると良い。

さらに、地域活動に繋がる仕組みづくりに関して付け加えると、町内会や自治会をはじめとする地域関係団体との繋がりが重要である。しかし、働く世代、更には新規転入者などの場合には、古くから活動する地域関係団体に新たに入ることは難しい印象もある。生涯学習を推進する機関との連携を図り、転入者を含む働く世代の意欲のある人が気軽に参加できる枠組みが整えられ、地域関係団体のニーズ把握をもとに、所要の学習プログラム等を展開することで、地域活動への参加促進にも繋がり、良いと思う。

「さいたま市生涯学習フェスティバル」のような地域のイベントを通じて、働く世代の興味や関心を引き出すような継続した取組みも重要と感じた。

最後に、国の指針では障害者について言及がされているが、障害を抱えた人向けの生涯学習や社会教育を福祉関係機関と連携して学習プログラムに展開することが重要である。また、働く世代が障害者の生涯学習を促進する支援者としての立場で、所要の専門スキルを学ぶような学習機会が提供されると国の指針がより実効的なものになると思う。

<石川副議長>

まず、核となるのは人であると考えた。小さな組織をまとめることや地域の繋がりをどのように作っていくのかということの核心には、人の力や思いがあり、個が仲間を作り、その仲間から自由でボーダレスな繋がりが広がるため、人から人への繋がりの連鎖がある。

また、私らしく・自分らしくという考えがキーワードとして挙げられると思う。学びをすることが目的でなく、楽しさの中で生まれたスパイラルや行動が結果として学びになるということが働く世代の生涯学習におけるポイントである。好きなことや関心のあること、学生時代に学んだことなどを社会に出て再発見するということがきっかけとなり、学びがスタートするのではないかと感じた。

さらに、中高生だけでなく、ドロップアウトした方への学びの保障の仕組みづくりが公でどのように考えられていくのが重要である。

ウ 意見交換

自身の発表の補足、互いの提言内容についての意見や質問、話し合いを行った。

<林委員>

皆さんの意見を聞き、納得した。体験することが貴重で重要であるとされている時代の中で、働く世代を含めて人々が体験をできる場を作ることが重要である。体験の中に気づきがあり、結果として学びになるということもあるが、普段の仕事や自分のできること以外にも様々な体験ができるということを届けられると分かりやすいと思う。

<若原議長>

体験や実感は重要なキーワードであると思う。普段から生涯学習活動をしていると社会教育や生涯学習の価値や意義はわかるが、話を聞くだけではわからないと思うので、実際に体験する場を設け、豊かにするということが重要であると思う。

<加藤委員>

皆さんの話を聞き、コーディネーターが一番重要であると思った。さいたま市は公民館に社会教育主事や社会教育士が多く配置されているが、市民に周知されていない。活発に事業を行っている場所もあるが、もう少しコーディネーターの役割を担う人々に活躍をしてもらいたいと思うので、実行委員会や協議会など、コーディネーターが地域の人々を巻き込んで活動する仕組みができると良いと思う。

<若原議長>

皆さんのおっしゃる通り、社会教育職員の本来の役割はプロフェッショナルとしてのコーディネーターである。プロとして力を発揮するためにどのように仕組みを整えるかが行政課題であると思うので、提言書に盛り込んでいくとよいと思う。

<林委員>

社会教育主事の方々と関わる中で活躍の場がないという話も聞いている。生涯学習をコーディネートするプロの力を生かすことができるように改善するだけでも大きいと思う。

<若原議長>

かつては社会教育の場でしか機能しなかった資格が、現在では幅広く使うことが出来るようになっているので、林委員がおっしゃっていたように市長部局との連携などで行政分野でも学習のサポートや人を繋げることができる。取組が広がると連携が深まると思うので、このあたりも考えていきたいと思う。

<佐野委員>

公民館で社会教育指導員の方と関わる際に、地域のリソースを非常によく把握していると感じるので、それが生かされないことはもったいないと思う。

<若原議長>

本日も活発に意見が挙げられたので、意見を整理しながら、提言をまとめていきたいと思う。

エ 本日のまとめ

<石川副議長>

先ほど林委員が体験の重要性をおっしゃっていたが、それぞれの生活圏や生活リズムの中でできる小さな体験から何かが始まるのではないかと思った。

また、働く世代の生涯学習と地域活動への橋渡しというテーマを改めて振り返るとやはり橋渡しとは何か、生涯学習とは何かという考えにたどり着くと感じた。橋渡しとは何かを考えたときに、結果として学びに繋がったり、繋がりに結びついたり、体験ができていたりなど参加や参画に結びついているということが考えられた。

さらに、このような参加や参画、小さな体験からドロップアウトされた方など、取り残された人々がいるのではないかと感じた。身体的に障害がある方や社会的に障壁のある方に手を差し伸べていくという視点も忘れてはいけないと思う。

<若原議長>

意見交換や副議長の話でも挙げられたことだが、改めて体験を通した学びが重要である。学習や教育に対するハードルは高く学校型の教育というイメージが強いが、それとは異なる体験や活動を通して学ぶことができることが社会教育の特徴だと思うので、この特徴を改めて形にしていくことが重要である。そして、何かのために学ぶというよりは、体験や活動を通して学びがあることに気づき、その価値にも気づくことができる仕掛けが必要であると改めて感じた。

さらに、皆さんもおっしゃっていたように社会教育士などのコーディネーターの役割は社会的、政策的に重視されていると思うのでさいたま市の地域条件に即してどのように形にしていくかが重要である。さいたま市は公民館や社会教育施設が非常に多く設置されているので、これを生かし、働く世代が繋がることができるように機能していくことが重要であると改めて感じた。

本日出た意見を見直ししながら提言書の作成を進めていきたいと思う。

4 閉会

働く世代が生涯学習を身近に感じ
るきっかけづくり

働く世代が地域活動につな
がる仕組みづくり

つながり

ゆるやかな
つながり

働く世代の学習
をコーディネート
する支援者
公算の仕組み

働く世代
Ⅱ 子育て世代
Ⅱ 共通話題
Ⅱ 子どもの成長
教育
親の悩み

リカレント
教室
ウェル
ビーイング
興味
(夢)

口コミ

入口
きっかけ

学校
コミュニテ
ィ
スクールの
活用

子どもと
共に
ネットワー
ク作り

生涯学習・社会
教育を通じて
ウェルビー
ィングとは何か
明確化、自己の
目的

場

小さなつながり
から
集まり
はじまる

駅前
(入学)

学ばなければ
ならない
必要性

朝活

子育て中の親
学び 必要

働く世代の時間の
制約を感じた
・「時間夜間・
土日」の配慮
・「場(集合・Web)
リアルタイム・オン
ライン

こんな学びが
したいという
声を集める方法
周知
ネットワーク化

地域・人
かかわりからの
スタート

図書館
多世代がいる
本以外も

公民館
拠点場として

プロジェクトの
内容では
集まる、当事者
子育て、防災、
介護など

無理をしない
楽しんでする
ワクワク
ドキドキ

負担のない時間
の中でのミー
ティングの場
SNS
集まってる会議

自分のスキルの
発揮できること

子どもがいるなら
そのつながりで

高校・大学等関
係機関との連携
・地域の場から
の学習のステッ
プアップ
・学ぶ場

継続の重要性

「楽しさ」を
大切に

1日限りの講座
学びのステップ
アップの仕組み
さいたま市を超
えて、県、関東
全国、世界へ

新組織の編成
Ⅱ 共通の課題の
取り上げ
Ⅱ 自分たちで
立案計画
Ⅱ 共に成長する

次のステップに
進んでいこうと
する気持ちに
なるような
新しい気づき
があるように
<実感>

実感

防災の
イベント
他の活動へ

自分らしく
組織・団体
らしさ
活動
学び

たのしさ
学びのスパ
イラル

祭りなど
すてにある
イベント
活用

誰が やるか
誰と やるか
プロジェクト
コーディネーター
プロフェッショナルな職員が必要
またそれに準ずる
人の育成

補足
(地域づくり)と
いう入口が一番
分かりやすいの
でそこに特化し
ても良いのでは
ないか

・地域
・人
・行政
・組織化
小さな連携

人と人との
つながり
個→なかま

自由
ボーダレス
多世代

地域活動団体
(福祉・環境等)
のニーズ把握
→“学習・研修”
アウトソース
社会教育

・町内会、自治
会への働きかけ
・オープン化

活動する人の
サポート役
組織・所属を
超えた

どんな
「体験」
ができるか
明確化
「体験から気づ
き」

学習者として

学びの
公共性

「働く」という
ことの多様性

現在の組織の
改革
Ⅱ 多様性

Ⅱ 学びたい意欲
多様なテーマ

興味・関心を引き
出す
生涯学習フェス
ティバル
・働く世代の学
ぶ同立で
「ウェルビー
ィング」

これまで興味・
参加なかった人
を巻き込む方策
の試み
ワクワク感
学び合い
ランチ

・好き
・関心
・再発見

・学び
・仕組みの保障

・生きる
・生活
・考える

いつでもどこ
誰と誰が
何を
どうするのか
具体的

伝統文化活動
(地域)と
繋げていくには

そもそもの
有用性？
なんのために？
なぜ大切？

市長部局と「地
域づくり人材育
成・プロフェッ
ショナル」
連携・融合

・発達障害等を
有する者への生
涯学習支援
(チャレンジス
クール)

・ソーシャル
スキルトレー
ニング
福祉党との連携
・支援者としての
働く世代の参
画